

年間第二十九主日

ルカ 18・1-8

2019.10.20

カトリック高円寺教会

主任司祭 吉池好高神父

今日の福音は、イエスさまが語られたやもめと裁判官のたとえ話を伝えています。イエスさまが語られたこのお話がたとえ話と言われるのは、このお話の前に、「イエスは、気を落とさずに絶えず祈らなければならないことを教えるために、弟子たちにたとえ話を話された」と語られているからです。イエスさまは弟子たちに、そしてわたしたちに、気を落とさずに絶えず祈ることを教えるためにこのやもめと裁判官のお話をしてくださったのです。

このお話の中のやもめが裁判官に願い出たことは、自分が求める裁判を開いて欲しいということでした。そのやもめの願いに対して、神を畏れず、人を人とも思わない傲岸不遜な裁判官はその訴えを取り上げようとはしなかったと語られています。けれども、やもめは裁判官のそのような態度にひるまなかったのです。やもめの粘り強い陳情に根負けした裁判官は、とうとう彼女の願いを聴き入れざるを得なくなりました。このように、あなたがたも気を落とさずに絶えず祈りなさいとイエスさまは教えておられるのです。祈りとは、たとえそれがすぐに聴きとどけられたと思えなくとも、気を落とさずに、願い求めることを訴え続けることだとイエスさまは教えてくださっているのです。

たとえ話のやもめの姿は、「求めなさい。そうすれば与えられる。探しなさい。そうすれば見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる」というわたしたしが何度も聴いたイエスさまのおことばを思い出させます。イエスさまは、わたしたちの祈りが聴きいれられることを保証してくださり、わたしたちを励ましてくださるのです。わたしたちが気落ちしてしまい、祈れなくなるときがあることを知っていてくださるイエスさまは、そのようなわたしたちのためにこのお話をしてくださっているのです。

祈るということは、祈りを聴いてくださる神さまがおられることを信じて、その信仰に踏みとどまって、気を落とさずに願い求め続けることです。祈って

も願いがすぐにはかなわないという経験の中で、わたしたちは、それでも願い求めて祈り続けるか、あるいは、祈ることをやめてしまうかの岐路に立たされます。祈っても無駄だという思いに取り付かれて、祈ることをやめてしまうとき、わたしたちは、それまで願い求めて祈り続けてきた神さまのもとから離れてしまいます。祈るということは、神を信じていることの証なのです。今日のイエスさまのお話の中のやもめは、門前払いをし続ける裁判官のもとに通いつめて、ついに訴えを取り上げてもらうことに成功しました。裁判を求めるやもめには、彼女がしたようにするしか方法がなかったのです。

たとえ話に続けて、今日の福音には次のように語られています。「主は言われた。『この不正な裁判官の言い草を聞きなさい。まして神は、昼も夜も叫び続けている選ばれた人たちのために裁きを行わず、彼らをいつまでも放っておかれることがあるか。言うておくが、神は速やかに裁いてくださる』」。

ここでは、終末の神の裁きが語られています。今日の福音の直前のルカ福音書 17 章 20 節からの箇所には、神の国はいつ来るのかと尋ねたファリサイ派の人々の質問に答えてイエスさまが語られたおことばが伝えられています。ファリサイ派の人々は、旧約の預言者たちのことばに基づいて、終末の神の裁きのときに神の国は来るものと受け止め、それはいつ来るのかと尋ねたのです。それに対して、イエスさまは、ファリサイ派の人々が考えているようなときは必ず来るであろうが、それは、全く思いがけない時に、思いがけない仕方で来ると語られています。ルカ福音書のこのような文脈の中で、今日わたしたちが聞いたイエスさまのやもめと裁判官のたとえ話は語られているのです。そのように受け止めて、今日の福音のイエスさまのおことばにあらためて耳を傾けてみたいと思います。

今日のおことばの中で、わたしたちにとって気になるのは、「まして神は昼も夜も叫び続けている選ばれた人たちのために裁きを行わず、彼らをいつまでも放っておくことがあるか」というおことばです。選ばれた人たちとはどういう人のことだろうかとわたしたちは考えてしまうかもしれません。けれども、イエスさまが言われる選ばれた人たちとは、わたしたちが考えるような特別に聖なる人たちのことではありません。むしろ、たとえ話のやもめのように、無視され続けても決して諦めずに神に向かって叫び続ける人たちのことです。神さまは、そのような人々の叫びを救い上げ、選び取って聴きいれてくださるとイエスさまは語っておられるのです。

「言うておくが、神は速やかに裁いてくださる」とイエスさまは言われています。これはどういうことでしょうか。そう思って、もう一度今日の福音の直前に語られているイエスさまのおことばを思い出してみるなら、そこには次のように語られています。「神の国は、見える形では来ない。『ここにある』『あそこにある』と言えるものでもない。実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ」とイエスさまは言われています。このおことばによって、イエスさまは弟子たちに、そしてわたしたちに御自分に目を向けるように呼びかけておられるのです。イエスさまは、ファリサイ派の人々が考えていたのとは全く違う形で神の国を指し示しておられるのです。

「神の国はあなたがたの間にある」と言われたイエスさまは、弟子たちに『主の祈り』を教えてくださいました。わたしたちも弟子たちから伝えられた主の祈りを日々唱えています。「天におられるわたしたちの父よ、御名が聖とされますように」という願いで主の祈りは始まります。「神の国はあなたたちの間にある」と弟子たちに言われたイエスさまはあのときと同じように、わたしたちとともにいて、わたしたちとともにこの祈りを祈ってくださるのです。どんなにかイエスさまは神の国が来ることを願っていたことでしょうか。天におられるわたしたちの父である神が聖なるお方であることが全ての人に示され、全ての人に尊ばれるようになることが、イエスさまの生涯をかけての祈りであったのです。絶対的な信頼の中で、イエスさまはこの願いを全ての人のお父である神に訴え続けられたのです。イエスさまが父と呼びかけておられる全てのものの創造主である神は、その愛によってこの世界を創造されたのです。創造された者たちが、神によって創造されたこの世界の中で、創造主である神の祝福のうちに幸せに生きることが全て者の父である神のお望みであることをイエスさまは確信しておられ、その確信によって父である神に、あなたがいてくださることを全ての人に示してくださいと訴えておられるのです。イエスさまの周囲には、たとえ話のやもめのように、この社会の無情さのゆえに、叫び続けざるを得ない人々の叫び声が満ちています。その人々の叫びがそのまま、イエスさまの父への祈り祈りにこだましているのです。そして、その祈りへとイエスさまはわたしたちを呼んでおられるのです。

言い表すことができない苦しみの中で、平和のうちに生きることを願って叫び続けている人々の叫びを心に留めたいと思います。その人々の叫びを御自分の祈りとして、わたしたちにお示しになったイエスさまと結ばれて、全ての人

が願っているように、平和のうちに生きることが出来る神の国の到来を求めて忍耐強く絶えず祈り続けたいと思います。たとえ話の中の裁判官のような人も含めて、この世界に生きる全ての人がイエスさまが示された神の愛の裁きに気付いて、神の御名を尊ぶことができる日が来ることを忍耐強く祈り続けたいと思います。